

職業性ストレスが高齢期の幸福感に及ぼす影響

斎藤 遥花

仕事関連のストレスは職業性ストレスと呼ばれる。過度なストレスは心身に悪影響を及ぼす一方、適度なストレスは物事の動機付けともなる（伊丹・阿部, 2022）。そのため、ストレスについて検討する際には、心身に及ぼすポジティブ・ネガティブの両面の影響を考慮する必要がある。

職業性ストレスには、様々な理論的枠組みがある。例えば、要求度—コントロールモデル（Karasek, 1985）、努力—報酬不均衡モデル（Siegrist, 1996）が提唱されている。これらは、高い負担（要求度・努力）が心身に及ぼすネガティブな影響を、適切な裁量（コントロール）や報酬（金銭的報酬・社会的承認・心理的尊重）が緩和すると示している。また、石川（2021）は役割や責任といった負担が高齢期の満足感をもたらすと述べている。

職業性ストレスが高齢期に及ぼす影響について、先行研究では高齢期の認知・身体機能への影響が検討されてきた（石岡, 2015a; Nilsen, et al., 2017）。しかし、職業性ストレスが高齢期の心理的側面に及ぼす影響については十分に検討されていない。これを踏まえ、本研究では職業性ストレス（負担・裁量・報酬）が、高齢期の幸福感（人生満足感・ポジティブ感情・ネガティブ感情）に及ぼす影響について検討する。仮説は次のように設定した。1、負担は責任感や達成感を通じて人生満足感につながる。2、負担がポジティブ感情に及ぼす負の関連は、裁量・報酬によって緩和される。3、負担がネガティブ感情に及ぼす正の関連は、裁量・報酬によって緩和される。

調査は、2013年のSONIC研究（榎藤, 2018）の一環として行われた。調査対象者は71-75歳の1147名であった。研究1では、最長職歴10年未満の者、55歳未満での退職者、データ欠損者を除外し、496名を分析対象とした。研究2ではさらに共変量・幸福感尺度のデータ欠損者を除外し、489名を分析対象とした。職業性ストレスの測定には、職業性ストレス尺度（石岡, 2015b）を用いた。この尺度は「勤務形態」「負担」「裁量」「報酬」の4因子構造が想定されている。

研究1では、勤務形態を除いた14項目3因子構造を想定した確証的因子分析を実施した。その結果、仮説の通りに「負担」「裁量」「報酬」に項目が分かれ、適合度は非常に良い数値となった。しかし、「裁量」と「報酬」の信頼性は十分とは言えなかった。研究2では、職業性ストレスと高齢期の幸福感との関連の検討のために、各変数の相関を確認し、独立変数を職業性ストレス、従属変数を高齢期の幸福感とした重回帰分析を行った。また、2つの職業性ストレスモデルに基づき、負担と裁量、負担と報酬の交互作用項についても検討した。その結果、人生満足度において裁量との間に負の関連が示された。また、負担と報酬の交互作用が認められ、報酬ストレスが低い群は人生満足度が高く、報酬ストレスが高い群は負担が大きいほど人生満足度が高かった。ネガティブ感情において裁量との間に有意な正の関連が示された。負担と人生満足度、ポジティブ感情・ネガティブ感情との間に関連は見られず、仮説1、2、3は棄却された。

負担に見合った適切な報酬がない時に負担感が人生満足感につながったことから、人生満足感が仕事のやりがい感に関連している可能性がある。また、裁量と高齢期の幸福感との間に負の関連が見られた。この背景には、ストレス反応の一種であるバーンアウトの影響があった可能性がある。今後、職業性ストレスが高齢期の幸福感に及ぼす影響の検討のために、職業性ストレス尺度の得点化の方法や項目内容の精査や変更、変数の追加、職種間の差異の検討を行うべきである。また、労働世代から高齢期への縦断調査を行う必要がある。（臨床死生学・老年行動学）